

我獨念繁者誰與予目成。

我獨り繁者を念ふ、誰か予と目成せん、

【字解】 〔一〕 稍聞、稍は聲稍、〔二〕 竹聲、〔三〕 推摩經に、譬如甘蕉竹葉と、〔四〕 凍折、賈島の詩、坐聞西林琴、凍折兩三枝と、〔五〕 爲鼓、司馬相如の辭、爲鼓一再行と、〔六〕 靜、張景陽の辭、構雲梯、靜靜と、〔七〕 飛、韓詩外傳に、雪花曰、雲曰、同雲と、和語のミソレ、〔八〕 身窮、歐陽修の文、人窮而愈工と、〔九〕 樂者、詩に、如此樂者何と、樂は笑と同じ、〔一〇〕 日成、屈原九歌少司命に、滿堂兮美人、忽獨與予兮日成と、日と目と談話して親しむ、俗に目くばせるのである、

【題義】 仲殊が雪中に西湖の寶林寺に遊ぶ詩に次韻して作る、

【詩意】 夜半に幽夢が覺めて、稍稍に竹聲や葦聲を聞く乃ち風雪の打つ聲である、是に於て起坐し凍折せる絃に手を入れて續彈する、爲に鼓すること一行一行再三行まで試みる、曲の終るころ漸く天明である、窗を開きて見れば玉樓が已に嵯峨と現出して在る、此の景を望んで忽ち二三子の事を懐ひ出す、筆を落して先づ第一番の句を飛ばすそれは二三子と共に竹林の會を催したく思ふのである、一身は孤鴻と同じく軽く、秀語は昔より寒餓の時に成ると聞いて居る、又身が困窮すれば反對に詩道は愈よ享るのである、寶雲寺の禪老は復た何事をか爲して居る、我が問は愚問であるとして唯笑うて孤煙の生ずるを指すであらう、我は獨り以心傳心の繁者を念ふけれど、其の言はずして單に目くばせして通ずる底の人は誰であるか、

〔一〕

〔二〕

寶雲樓閣闌干門。

寶雲の樓閣千門闌し、

【字解】 〔一〕 寶雲、寺の名、

林靜初無一鳥喧。

林靜かなる初一鳥の喧無し、

かれ、

閉戶莫教風掃地。

戸を閉ちて風をして地を掃はしむる莫し、

卷簾疑有月臨軒。

簾を卷いて月軒に臨む有るかと疑ふ、

水光激灩猶浮碧。

水光激灩猶は碧を浮べ、

山色空濛已斂昏。

山色空濛已に昏を斂む、

乞得湯休奇絕句。

湯休が奇絶の句を乞ひ得て、

始知鹽絮是陳言。

始めて知る鹽絮は是れ陳言なるを、

〔一〕 風掃地、太白の文、清風掃門、明月侍坐と、〔二〕 湯休、晉の沙門惠休は文に工、世祖命じて還俗せしめ、性を湯と屬ふ、〔三〕 鹽絮、世説に、謝太傅内集、俄而雪下、公曰雪紛何似、兄子朗曰、撒鹽空中、女道韞曰、柳絮因風起と、〔四〕 陳言、韓退之の文、陳言之於去と、

【詩意】 寶雲の樓閣は千門の人口に闌れて居る、が林中は全く靜寂にして一鳥の喧聲も無い、戸を閉ちて風の吹いて地を掃は教むる莫きも、簾を卷けば明かにして月が軒に臨むかと疑はしむるのである。水光は激灩として猶は碧色を浮呈して在る、山色は空濛として已に黄昏の状である、今寶雲の湯休が奇絶の句を乞ひ得て讀んで見る、始めて知る鹽絮は從來清新と稱せられたが是れ湯休に比すれば陳腐の言であるを、

【餘論】 後首を紀は評して結出三和意、是古法と、闌干門の三字、下の林靜に對して言ふならんが、聊か邪魔に類する感がある、詩の全格としては五古よりも七律の方が可、

次韻參寥同前

參寥に次韻す、同前

朝來處處白氈鋪

朝來處處白氈鋪く、

樓閣山川盡一如

樓閣山川盡な一如、

總是爛銀併白玉

總是是れ爛銀白玉を併す、

不知奇貨有誰居

知らず奇貨誰有つて居くを、

從海底出と、【一】白玉 太白の詩、小時不識月、喚作白玉盤と、【二】奇貨 「史記呂不韋傳」に、奇貨可居と、

【詩意】朝來起つて看れば處處に白氈が鋪きてある、樓閣も山川も盡な一如で異色の物はない、總て是れ爛銀と白玉とを併合するのみ、此の景を見て奇貨居く可しと得意になる者は誰であるかを知らな

【餘論】紀曰く、此真張打油矣と、公の集中に在つて最下位に在るもの、

與葉淳老侯敦夫張秉道同相視新河秉道有詩次韻二首

君不見元帥府前

君見すや元帥府前萬戟を羅ね、

葉淳老侯敦夫、張秉道と同じく新河を相視る、秉道詩あり、次韻す 二首

【字解】【一】元帥府 「舊五代史」

羅萬戟

濤頭未順千弩射

濤頭未だ順ならず千弩射るを、

至今鳳凰山下路

今に至るまで鳳凰山下の路、

長借一箭開兩翼

長く一箭を借りて兩翼を開く、

我鑿西湖還舊觀

我西湖を鑿して舊觀に還す、

一眼已盡西南碧

一眼に已に盡くす西南の碧を、

又將回奪浮山險

又將に浮山の險を回奪せんとす、

千艘夜下無南北

千艘夜下りて南北無し、

坐陳三策本人謀

坐ながら三策を陳す本人と謀る、

惟留一諾待我畫

惟一諾を留めて我が畫を待つ、

老病思歸眞暫寓

老病歸を思つて眞に暫く寓す、

功名如幻終何得

功名幻の如し終に何をか得ん、

從來自笑畫蛇足

從來自ら笑ふ蛇足を畫くを、

此事何殊食雞肋

此の事何ぞ殊ならん雞肋を食ふに、

古今體詩 次韻參寥同前

與葉淳老侯敦夫張秉道同相視新河秉道有詩次韻二首

錢鍾傳に、同光中、爲天下兵馬都元帥と、大將軍督と言ふと同じ、【一】濤頭 「吳越備史」に、梁開平四年、武肅王錢氏、始築捍海塘、復建錢湖通江等城門、江濤晝夜衝激、版築不就、因命強弩五百、以射湖頭、又觀築香山河、既而湖頭遂趨西陵、城基始定と、【二】鳳凰山 杭州城中に在る、趙抃の詩、老來重守鳳凰城と、【三】兩翼 「江月松風集」に、山頂有兩峯、儼如雙形、目曰鳳凰雙髻と、【四】還舊觀 「王羲之傳」に、庾翼謂羲之曰、昔昔有伯英草草十紙、過江亡失、常嘆妙迹永絕、忽見足下書、恍若神明、頓還舊觀と、西湖は白樂天死して二百有餘年後に西湖は公の力にて復た舊觀に還つたのである、【五】浮山 錢塘江中に在つて、潮水瀾激の處、【六】三策 「濟浦志」に、漢哀

憐君嗜好更迂闊  
 憐君嗜好更迂闊  
 得我新詩喜折屐  
 我新詩得喜折屐  
 江湖盡了我竟歸  
 江湖盡了我竟歸  
 餘事後來當潤色  
 餘事後來當潤色  
 一菴閒臥洞霄宮  
 一菴閒臥洞霄宮  
 井有丹砂水長赤  
 井有丹砂水長赤

帝時、賈誼奏言、治河有上中下三策、一、查初白曰、先生守杭時、開興水利、凡三、皆采衆議而成者、波羅橋茅山二河、創自監稅蘇軾、而轉運置成、則仁和知縣黃備也、西湖之役、創議者、錢塘縣尉許敦仁也、蘇軾、新河、以避浮山之險、者侯敦夫也、故云坐陳三策本人謀一也、  
 (八) 一語、張夫と乘道が一語する

を漢の宗資と范孟博の一語に比す、(七) 畫蛇足、史記楚世家に、人有遺其舍人一卮酒者、舍人相謂曰、數人飲此、不足、以獨、請畫地爲蛇、蛇先成者獨飲之、一人曰、吾蛇先成、引酒且飲、人奪之酒、而飲之曰、蛇固無足、今爲之足、是非蛇也、無用の事に努力するを畫蛇足と言ふ、(二〇) 食雞肋、燕つるには情しく、食ふには物足らざるの義、後漢楊修傳に、夫雞肋食之、則無所付、棄之則如可惜と、助はアラゴキ、(二二) 迂闊、漢王吉傳に、上以其言迂闊、不甚寵異也、孟子の迂遠と殆んど同じ、まはり遠くして實際の用に供し難き事、(二三) 折屐、晉謝安傳に、兄子元等、既破苻堅、驛書至、安方對客圍棊、了無喜色、既罷還、內過戶限、心甚喜、不覺屐齒之折と、(三四) 潤色、飾りて采を加へること、語意問に、東里子產、潤色之と、(三五) 洞霄宮、杭州に在る仙觀、(三六) 丹砂、仙人の食ふもの、

【題義】 杭州の刺史たりしとき、葉敦夫と張乘道との二人と共に水利の便を計り、新に運河を開鑿して巡視し、乘道詩成るに依つて之に次韻して作る、

【詩意】 君見玉はすや六七十年前に武肅王が元帥府前に萬戟を羅列し、狂濤を掣せんが爲に千弩を射て威を示せしことを、而して七十年後に今に至るまで鳳凰山下の路、長く一箭を借りて儼然山形は兩翼を張ることを、我は西湖を開鑿して西湖の面目を舊觀に還すことが出来た、努力の功ありて一眼中に西南方の碧を見盡すに至る、更に又東南の浮山の險を回奪せんと思ひ、千艘に多數の人を載せ夜下り南北となく來る、其の策を陳する本三人の智謀に由る、其の人は一諾して我が計畫する所を待つのみ、然るに我は老病に罹り歸思動き真に此に暫寓するのみ、考へて見れば功名は夢幻の如く終に何か得んや、從來の所業は自ら笑ふ蛇足を畫くが如く無益に力を勞する、此の新河を鑿せる事も何ぞ殊ならんや雞肋を食ふに、憐む君が嗜好も更に迂闊であることを、我が新詩を得てくだらぬものと思はずに喜んで屐を折らる、是に於て我が江湖に於ける所業は盡略ながらに了る我は竟に歸臥するもよい、猶ほ餘事あるも後來當に潤色するであらう、今よりは一菴に閒臥する、一菴と云ふは即ち洞霄宮である、其の洞霄宮の井には丹砂ありて水の色常に赤色を呈する、

(一)

(二)

荆溪父老愁三害  
 荆溪の父老三害を愁ふ、  
 下斬長蛟本無賴  
 下りて長蛟を斬る本無賴、  
 平生個強韓退之  
 平生個強韓退之、  
 文字猶爲鱷魚戒  
 文字猶は鱷魚の戒を爲す、

古今體詩 興業淳老侯敦夫張乘道同相視新河乘道有詩次韻二首

【字解】 (一) 三害、晉周處傳に、周處臂力絶人、不修、相行、最情肆恣、州人患之、自知爲人所惡、乃慨然有改、謂父老曰、今時處豈、何苦而不樂邪、父老嘆曰、

石門之役萬金耳

石門の役萬金のみ

首鼠不爲吾已隘

首鼠吾已に隘きを爲さず

江湖開塞古有數

江湖開塞古數あり

兩鶴飛來告成壞

兩鶴飛來成壞を告ぐ

勸農使者非常人

勸農の使者は常人に非ず

一言已破黎民駭

一言已に黎民の駭を破る

上饒使君更超軼

上饒の使君更に超軼

坐睨浮山如累塊

坐して浮山を睨す累塊の如し

髯張乃我結襪生

髯張は乃ち我が結襪の生

詩酒淋漓出狂怪

詩酒淋漓狂怪出づ

我作水衡君作丞

我水衡と作る君は丞と作れ

他日歸朝同此拜

他日朝に歸りて此の拜を同じうせん

「司馬相如傳」に、世必有非常之人、然後有非常之事と、「(八) 民駭 馮應楙曰、駭字作去聲、押、子由黃樓賦亦然、未知何所本也と、駭は本來は上聲九蟹の韻、然るに去聲を以て作る時に収む、古韻法、公の誤りか、又別に據る所あるか、(九) 上饒使君 信州

の上饒郡、教夫を指す、(一〇) 超軼 「莊子徐無鬼篇」に、天下馬有或材超軼と、(一一) 浮山 「南史庾亮傳」に、南起浮山、北抵岷石と、(一二) 髯張 「漢張釋之傳」に、王生者、善爲黃老言、處士、上嘗召居廷中、公卿盡會立、王生老人曰、吾讀解、固謂釋之、爲我結襪、釋之跪而結之、人或謂王生、王生曰、吾老且賤、自度終無益、於張廷尉、故聊使結襪以重之、諸公聞之、賢王生、兩重釋之と、(一三) 水衡 官名、漢の興邊の事、(一四) 作丞 王生と云ふ者、興邊を助けて其の丞と爲る、

【詩意】 荆溪の地の父老は常に三害を愁ふる、水下には長蚊を斬り且つ本無頼の者が善良化して始めて愁を消す、平生情に於て倔強なる韓退之も、水上の民を憐れんで文章を作りて鱸魚を戒めらる、石門の役即ち土木工事は萬金を費したるのみ、首鼠兩端の疑惑を爲ないで決断して去る、思ふに江湖の開塞は古來有數である、論よりも證據漢末の代には兩鶴飛來して成壞を告げしことがあつた、勸農の使者たる溫叟は常人ではない、僅に一言にて黎民の驚駭を論破する、又上饒の使君たる教夫も更に超軼の人である、坐ながら浮山の險を睨ること一累塊の看を爲す、而して髯張即ち秉道君は乃ち我が爲に襪を結んで呉れる賢者である、詩酒淋漓の際には狂怪の語を吐き出す、若し我が水衡の長とならば君は僕の副長と作れ、他日朝廷に歸るときは僕が希望通りの役を同じく拜命せんか、

【餘論】 紀曰く、二首皆氣機駿利、後首更恣逸と、王漁洋曰く、七古仄韻詩、法度悉同、單句末一字、可三平仄間用と、公の此篇以て其の論證とすることが出来る、

樓筍

樓筍

樓筍狀如魚剖之得魚子。味如苦筍。而加甘芳。蜀人以饌佛僧。甚貴之。而南方不知也。筍生膚囊中。蓋花之方孕者。正二月間可剝取。過此苦澀不可食矣。取之無害於木。而宜於飲食。法當蒸熟。所施略與筍同。蜜煮酢浸。可致千里外。今以餉殊長老。

【訓讀】樓筍、狀、魚剖の魚子を得るが如く、味は苦筍の如くにして、甘芳を加ふ、蜀人以て佛僧に饌し、甚だ之を貴ぶ、而して南方は知らざるなり、筍は膚囊中に生ず、蓋し花の方に孕む者、正二月の間、剝ぎ取る可し、此を過ぐれば苦澀食ふべからず、之を取るも木に害なし、而して飲食に宜し、法當に蒸熟すべし、施する所、略筍と同じ、蜜煮酢浸、千里外に致すべし、今以て殊長老に餉る、

贈君木魚三百尾。 君に贈る木魚三百尾、

中有驚黃子魚子。 中に驚黃子魚子有り、

夜叉剖瘻欲分甘。 夜叉瘻を剖き甘きを分たんと欲す、

簞龍藏頭敢言美。 簞龍藏頭敢て美と言はん、

願隨蔬果得自用。 願はくは蔬果に随つて自用を得ん、

勿使山林空老死。 山林に空しく老死せしむる勿かれ、

問君何事食木魚。 君に問ふ何事ぞ木魚を食ふ、

烹不能鳴固其理。 烹れども鳴くこと能はず固より其の理、

【字解】「木魚、木製の佛鼓、魚鱗を形る、讀經の時用ふ、今此れを併りて以て樓筍を言ふ、」  
「驚黃、驚兒は黃色である、」  
「子魚、王子、王彦輔の「鹽史」に、閩中鮮食最珍者、子魚也、剖之則子滿腹と、  
「西陽雜俎」に、印魚長一尺三寸、頰上四方如印有字と、子魚の大なるものを通印子魚と謂ふ、」  
「夜叉、閻叉、藥叉、同じ、梵音の直寫、譯して能破鬼、又捷疾鬼と謂ふ、王禪の詩、樓閣裏散夜叉頭と、」  
簞、沙門實事類記に、俗間謂、竹爲、簞孫と、虛全の詩、竹林吾最惜、新筍好看守、萬壽龍藏兒、樓閣裏、林叢と、筍のこと、  
「老死、老子」に、使、民至、老死、不相往來と、  
「七」烹不、「莊子山木篇」に、夫子出、子山、舍、子故人之家、故人喜命、豎子、殺、雁而烹之、豎子謂曰、其一能鳴、其一不能鳴、請笑殺、主人曰、殺不能鳴者、

【題義】樓閣筍の狀は魚剖の魚子を孕むが如くで、其の味は苦筍の如くにして甘芳の味も含んで居る、蜀人は之を佛僧に供して貴重之物とする、南方地方の人は之を知らない、其の筍は膚囊中に生ずるは是れ花の方に孕むものである、春正月か又は二月の間に剝ぎ取るがよい、此れより以後の月は苦澀にして食ふことが出来ない、而かも早く筍を取つても根本の木に害はない、飲食せんと欲するに蒸熟せしむる法は竹筍と異なる、蜜にて煮たり又は酢に浸したりせば之を遠地に餉ることが出来る、今以て之を仲殊長老に餉ることとする、

【詩意】君に贈呈する木魚は三百尾ある、此の中には驚黃もある子魚子もある、夜叉は瘻を剖いて人間に甘味を分たんと欲する、簞龍が頭を藏して驚はさないので敢て美なりと言ふはいらぬ、今之を贈呈するから願はくは蔬果と併して自用に供し玉はば大幸である、之を山林に此の儘老せしむるは無益

である、君に問ふ木魚を食ふは何事である、来るも鳴く能はざるは固より其の理である、  
【餘論】 紀曰く、夜又不雅、結織佛と、

次韻曹子方龍山眞覺院瑞香花

曹子方が龍山眞覺院の瑞香花に次韻す

幽香結淺紫。來自孤雲岑。  
骨香不自知。色淺意殊深。  
移栽青蓮宇。遂冠蒼葡林。  
初爲楚臣珮。散落天女襟。  
君持風霜節。耳冷歌笑音。  
一逢蘭蕙質。稍回鐵石心。  
置酒要妍暖。養花須晏陰。  
及此陰晴間。恐致慳膏霖。  
彩雲知易散。鸚鵡憂先吟。

幽香淺紫を結び、來ること孤雲岑よりす、  
骨香ばしきも自ら知らず、色淺くしく意殊に深し、  
移して青蓮宇に栽る、遂に蒼葡林に冠たり、  
初して楚臣の珮と爲り、散じて天女の襟に落つ、  
君は風霜の節を持し、耳は歌笑の音に冷かなり、  
一たび蘭蕙の質に逢うて、稍く鐵石の心を回す、  
置酒して妍暖を要す、花を養ふには須らく晏陰なるべし、  
此の陰晴の間に及んで、慳膏霖を致すを恐る、  
彩雲散じ易きを知る、鸚鵡先吟を憂ふ、

明朝便陳迹。試著丹青臨。

明朝便ち陳迹、試みに丹青の臨を著けん、

【字解】 一、 樓紫、楊行敏の詩、杜鵑花發杜鵑啼、樓紫深紅更勝、  
したるもの、二、 色淺、李義山の詩、色淺爲依惜と、三、 青蓮宇、  
ふ、四、 楚臣珮、前已に辨す、五、 天女襟、初は結を合せて麗と爲すもの、  
る、六、 風霜、後漢盧植傳論に、風霜以別草木之性、危懼而見貞良之節と、  
對、七、 耳冷、唐の無名氏「朝野僉載」に、孟安微、  
蘭蕙質、江文通の詩、鬱鬱想蕙質と、八、 鐵石心、「魏武故事」に、  
の詩、幸及亭午猶研吸と、九、 養花、唐詩仲林花品に、每至牡丹開月、  
ふ、一〇、 慳膏霖、「文酒清話」に、東京周默、未嘗作東道、一日請客、  
災、韻有開庭周秀才、莫道上天無感應、故交風雨一齊來、蓋諺有慳  
地驚いて變異あるを言ふ、一七、 彩雲、白樂天の詩、彩雲易散琉璃  
離離に、徒恐鸚鵡之驚鳴、願先百草爲不芳と、一八、 鸚鵡、鸚鵡又  
【題義】 曹子方が杭州龍山眞覺院に栽る瑞香花を詠したる詩に次韻したのである、

【詩意】 幽香にして淺紫色の花を開く、此の瑞香は本孤雲岑より來るのである、  
を知らない、色は淺紫であるが意は殊に深い、移して眞覺院の梵庭に栽う、  
爲る、其の香氣は初して楚臣の珮と爲り、又花は散じて天女の襟上に落つる、  
節を持する人である、其の耳は清淨にして歌笑の音を聆くに冷澹である、  
然るに此の花の爲には鐵石

の心腸も同らせらる、酒肴を設けて客を招き研暖を要す賞する、花を養ふときは晏陰の天がよい、されど此の陰晴の中間に在つて、恐らくは平生慳嗇の霖を致すであらう、彩雲は散じ易きを知るのみでない、鷓鴣も吾が吟する先に憂へ啼く、明朝は便ち陳迹となれば、試みに畫筆を以て之を臨摹する必要がある、

【餘論】 紀曰く、縮合得好、用三廣平事無迹と、五古平聲一韻の詩、七古一韻詩の如く下三字、孤雲岑、憂先吟、丹青臨、僅に三句のみ、而かも來自、鷓鴣、試著と必ず仄聲を置く、公が古詩を學ぶ者は、此等の處へ著眼するを要するのである、

送小本禪師赴法雲

小本禪師法雲に赴くを送る

寓形天宇内出處會有役  
澹然都無營百年何由畢  
山林等憂患軒冕亦戲劇  
我未即歸休師寧要安逸  
王城滿豪傑議論紛黑白

形を天宇の内に寓し、出處會す役有り、  
澹然渾て營無くんば、百年何に由つて畢らん、  
山林も等しく憂患、軒冕も亦戲劇、  
我未だ即ち歸休せず、師寧ぞ安逸を要せん、  
王城豪傑滿つ、議論黑白紛たり、

聖諦第一義對面誰不識

聖諦第一義、對面誰ぞ不識、

師來亦何事孤月挂空碧  
是身如浮雲安得限南北  
出岫本無心既雨歸亦得  
珠泉有舊約何年挂餅錫

師の來る亦何事ぞ、孤月空碧に挂かる、  
是の身浮雲の如し、安んぞ南北を限るを得ん、  
岫を出で本無心、既に雨ふる歸るも亦得、  
珠泉舊約有り、何の年か餅錫を挂けん、

【字解】 〔一〕寓形、陶淵明歸去來辭に、寓形宇内復幾時と、〔二〕天宇、魏都賦に、天宇駭、地虛驚と、〔三〕有役、陶淵明の詩、問君亦何爲、百年會有役と、〔四〕澹然、揚雄長楊賦に、使海内澹然水無邊城之雷、金革之患と、安靜の狀を言ふ、〔五〕無營、蔡邕傳に、安貧樂賤、與世無營と、〔六〕軒冕、揚雄傳に、僕軒冕、雜衣裳と、杜子美の詩、本無軒冕意と、〔七〕王城、張平子東京賦に、總風雨之所交、然後以建王城と、〔八〕黑白、楚辭九章に、變白而爲黑兮、例以上以爲下と、〔九〕聖諦、傳燈錄に、梁武帝問、如何是聖諦第一義、達磨答曰、廓然無聖、又問對朕者誰、答云不識と、眞諦と俗諦と不二と爲るを聖諦と謂ひ、道法の最上なるを第一義と言ふ、〔一〇〕空碧、樂天の詩、煙波澹澹空碧と、〔一一〕是身、杜子美の詩、是身如浮雲と、〔一二〕南北、禪者の詩、本來無東西、何處有南北と、〔一三〕出岫、陶淵明の辭、雲無心而出岫と、〔一四〕既雨、周易に、既雨既處と、

【題義】 杭州淨慈寺の大通禪師小本が汴京の法雲寺貫首と爲つて赴くを送る詩、  
【詩意】 形を天宇の内に寓する以上は、出も處も會す役とする所がある、澹然として渾て何の營むこと無ければ、此の百年の壽命何に由つて畢らんとするぞや、山林に入るも等しく憂患はある、軒冕の

身となるも亦戯劇に類する、我は官を辭し歸休の志はあるが即刻とは言はない、師は方外の人であるが、安逸を要することは出来ぬ、今日から王城に赴き玉ふが、王城に梁武の如き豪傑が充滿する、各の議論を好んで黑白を紛争する、各の我は聖諦第一義を悟ると思つて居る、對面して誰に向つて不識の語を發し玉ふや、師の來るは亦何事である、孤月が空碧に掛かるに譬へてよい、僕は想ふ是の身は浮雲の如きものかと、東西南北の方を限定して居ることは出来ない、軸を出づるとき本無心である、既に雨らすの用が済めば歸るも亦自由に得る、珠泉に對坐するの舊約があるが、何の年にか買首を罷めて餅錫を珠泉の林中に掛け玉ふや、

【餘論】紀曰く、意思甚擺脱、故不落窠臼と、公得意の作、僧を送る詩として、毫髮も遺憾なきものである、

書渾令公燕魚朝恩圖

渾令公、魚朝恩を燕する圖に書す

威寧英氣似汾陽、  
威寧の英氣汾陽に似たり、

夜飲軍容出紅妝、  
夜飲軍容紅妝出づ、

不須纏頭萬匹錦、  
須ひざるも萬匹の錦を纏頭するを、

知君未辦作呂強、  
知る君が未だ呂強と作ることを辦せず、

【字解】(一) 威寧 唐の涇州は中書令より榮轉して、威寧郡王に封ぜらる、(二) 汾陽 郭子儀は汾陽郡王に封ぜらる、(三) 軍容 唐魚朝恩傳に、代宗幸陝、朝恩爲天下軍容宣慰使、

令官である、(四) 紅妝 「妝」に、梳妝、紅妝、紅妝、紅色の化粧、(五) 纏頭 俗にハナ、假借である、唐書に、代宗昭王帝等、就郭子儀、爲飲脚局、朝恩以錦彩數萬、與故人纏頭と、(六) 呂強 字は漢盛、後漢の人、乃ち宦官にして賢者である、

【題義】渾令公と魚朝恩との宴會する圖に題して作る、

【詩意】威寧の英氣は汾陽の英氣に似て居る、夜飲して軍容の朝恩の爲め席に美人をして周旋せしむる、纏ひ纏頭するに萬匹の錦を以てする程の豪奢はしないも、知る君が未だ呂強の清忠と作るを辦せざることを、

【餘論】紀曰く、殊嫌三直致と、紅は會て仄用の例は無く、呂は會て平用の例は無し、絶句の古體と見るべきか、

龐公

龐公

襄陽龐公少檢束、  
襄陽の龐公檢束少し、

白髮不髡亦不俗、  
白髮髡せず亦俗ならず、

世所奔趨我獨棄、  
世の奔趨する所我獨り棄つ、

我已餘彼不足、  
我已に餘り有り彼足らず、

鹿門有月樹下行、  
鹿門月あり樹下に行く、

【字解】(一) 襄陽 今日の湖北省襄陽道、(二) 龐公 東漢襄陽の人、世に龐德公と稱す、(三) 少檢束 韓愈の詩、近侍李杜無檢束と、常人の用ふる規則などは眼中に無い、(四) 不髡 髡は髮を斬ること、(五) 不俗 俗は普通、雅俗の俗では



虎溪無風舟上宿。 虎溪風無舟上宿。  
 不識當時捕魚客。 識らず當時捕魚の客。  
 但愛長康畫金粟。 但愛す長康の金粟を畫くを。  
 杜口如今不復言。 口を杜ちて如今復た言はず。  
 龐公爲人不曲局。 龐公人と爲り曲局せず。  
 東西有人問老翁。 東西人あり老翁に問はば。  
 爲道明燈照華屋。 爲に道へ明燈華屋を照らすと。

六八四  
 なく、僧俗の俗に見る、【七】 襄陽、  
 湖北省襄陽縣東南三十里、一名蘇嶺  
 山、【八】 虎溪、 逸公客を送りて虎  
 溪を過ぎず、【九】 捕魚、 桃花源  
 記に、武陵人捕魚爲業と、【十】  
 長康、 名畫記に、顧愷之、字長康、  
 於瓦棺寺北殿内、畫維摩居士、畫  
 畢光耀月餘と、【十一】 金粟、 杜子  
 美の詩、虎頭金粟影、神妙獨難忘  
 と、【十二】 曲局、 毛詩に、予愛  
 曲局、傳に同卷也と、

【詩意】 襄陽の龐公は物の爲に檢束されぬ、白髪を垂れて僧の如くに剃るでもないが、と云うて普  
 通の俗人でもない、世人の人が奔趨する利欲は公は獨り放棄して關係しない、而かも我に於て福も榮  
 も餘りあつて奔趨の徒は却つて不足である、鹿門山に月のあるときは得得として樹下に行き、虎溪に  
 風の無きときは舟上に悠悠と宿泊する、當時捕魚の客とは關係しないが、但愛情する長康が金粟如來  
 即ち維摩を畫くを、口を杜ちて如今復た何事も饒舌らない、龐公は元來檢束を忌む人況んや曲局を  
 や、東西に人ありて老翁に問はば、老翁は爲に道へ明燈華屋を照らすと、  
 【餘論】 紀曰く、語皆淺近と、龐公を詠するには良工の苦心を示すべきであるが、此の詩は精采が少  
 しもない、龐德公、龐居士の二人は維摩居士が振旦に出現したもので、歴史上の人ではない、

戲書

五言七言正兒戲。 五言七言正に兒戲、  
 三行兩行亦偶爾。 三行 兩行亦偶爾、  
 我性不飲只解醉。 我が性飲まざるも只醉を解す、  
 正如春風弄羣卉。 正如春風の羣卉を弄するが如し、  
 四十年來同幻事。 四十年來幻事を同じうす、  
 老去何須別愚智。 老い去つて何ぞ須ひん愚智を別つを、  
 古人不住亦不滅。 古人は不住亦不滅、  
 我今不作亦不止。 我今不作亦不止、  
 寄語悠悠世上人。 寄語す悠悠世上の人、  
 浪生浪死一埃塵。 浪生浪死一埃塵、  
 洗墨無池筆無冢。 墨を洗ふも池無く筆に冢無く、

戲書

五言七言正に兒戲、  
 三行 兩行亦偶爾、  
 我が性飲まざるも只醉を解す、  
 正如春風の羣卉を弄するが如し、  
 四十年來幻事を同じうす、  
 老い去つて何ぞ須ひん愚智を別つを、  
 古人は不住亦不滅、  
 我今不作亦不止、  
 寄語す悠悠世上の人、  
 浪生浪死一埃塵、  
 墨を洗ふも池無く筆に冢無く、

【字解】 【一】 不住亦不滅、唯識  
 論に、生相、謂本無今有、住相、  
 謂生位暫停、異相、謂住別前後、  
 滅相、謂暫有還無と、【二】 不作  
 亦不止、 圓覺經に、云何四病、一者  
 作病、二者任病、三者止病、四者滅病  
 と、【三】 浪生浪死、 經典に、流  
 浪生死と、【四】 無池、 豫章志  
 に、臨川墨池、王羲之學書處、至今  
 池水盡黑と、【五】 筆無冢、 國史  
 補に、長沙懷素法師、素好草書、  
 自言得草書三昧、素筆堆積、埋于  
 山下、號曰筆冢と、

聊爾作戲悅我神 聊爾戲作我神

【詩意】五言の詩を作り七言の詩を作るも正に見戲である、三行の字を書し兩行の字を書するも亦偶爾之を作すのである、我が天性酒を飲まないが醉中の趣は解して居る、譬へて見れば春風が羣卉を弄するが如きものである、四十年來此の幻事を同じく繰り回して居る、老い去つては何ぞ愚と智とを區別することを須ひんや、思ふに古人は皆不住不滅の人、我も今亦不作不止の人である、語を悠悠として居る世上の人に寄するが、浪りに生れたり浪りに死したりするが畢竟は一埃塵である、昔墨を洗ふ池も有り筆を埋むる冢もあつたが今は無い、今や聊爾に戲詩を作るが唯我が神を悦ばすのみである、

次韻劉景文西湖席上 劉景文の西湖の席上に次韻す

二老長身屹兩峰 二老長身兩峰屹たり、  
常撞大呂應黃鍾 常に大呂を撞きて黃鍾に應ず、  
將辭鄴下劉公幹 將に鄴下を辭せんとす劉公幹、  
却見雲間陸士龍 却つて見る雲間の陸士龍、

【字解】二老 劉景文と其の友、二屹 屹然は山の聳えて高き貌、二兩峰 兩峰、王註に、武林有南北兩峰と、二大呂 周鼎の大鐘の名、周室の寶器、又十二律の一、十二月の異名、二黃鍾

白髮憐君略相似 白髮憐む君が略相似たるを、

青山許我定相從 青山我に許す定んで相從ふを、

我今官已六百石 我今官已に六百石、

慙愧當年邴曼容 慙愧す當年邴曼容、

昔律の名、十二律の一、十一月の異名、【六】鄴下 漢の縣名、三國の時、魏都、河南省臨漳縣の地、【七】劉公幹 劉楨字は公幹、東平の人、曹操の幕賓と爲つて常に鄴下に居る、【八】雲間 晉陸雲傳に、字士龍、吳郡烏程、素未相識、嘗會張華坐、華曰、今日相遇、可勿爲常談、雲因抗手曰、雲間陸士龍、陸曰、日下荀鳴鶴、鳴鶴陸字也、【九】白髮 白樂天の詩、白首青山約、抽身去得無と、【一〇】六百石 漢兩關傳に、琅琊邴漢、亦以清行徵用、王莽秉政、遂歸、老子鄭里、兄子曼容、亦以美志自修、爲官不肖過六百石、自助去、其名過出於漢と、

【題義】劉景文が杭州西湖に會集する席上の詩に次韻して作る、

【詩意】二老の長身は兩峯が屹と聳ゆる狀である、一老が常に大呂を撞けば一老は黃鍾を以て之に應ずる、一老は將に鄴下を辭せんと欲する劉公幹に類して居る、一老は雲間の陸士龍の文才を思ふ、而かも年輩も亦憐む略相似たることを、青山の遊びは我等と相從することを許すや否や、我は今官は六百石の小官である、之を辭して歸らざるは當年の邴曼容に對して慙愧する、

【餘論】略相、定相、許我、我今、例の作法を見る、

次韻答馬忠玉

次韻して馬忠玉に答ふ

坡陀巨麓起連峰。

坡陀の巨麓連峰起る、

積累當年慶自鍾。

積累當年慶自から鍾まる、

靈運子孫俱得鳳。

靈運の子孫俱に鳳を得、

慈明兄弟孰非龍。

慈明の兄弟孰れか龍に非ざらん、

河梁會作看雲別。

河梁の會は作す雲を看て別るるを、

詩社何妨載酒從。

詩社何ぞ妨げん酒を載せて從ふを、

祇有西湖似西子。

祇西湖の西子に似たる有り、

故應宛轉爲君容。

故に應に宛轉君が爲に容づくるべし、

【字解】(一) 坡陀 路不平の貌、

(二) 連峰 謝靈運の詩、連峯巖二千

仞と、「王註」に、坡陀不平之麓、起

爲連接之峯、若其人之間、案編慶

と、(三) 積累 「漢書仲舒」に、積

累德之效と、(四) 子孫 靈運の

子孫、鳳の子超宗、(五) 慈明 後

漢の荀爽、字は慈明、潁川の人語つ

看雲渡橋之題と、「八」 詩社 梅華の詩、春色晴迷詩社遊と、「九」 宛轉 劉廷芝の詩、宛轉無用能幾時と、やはらかに動く貌、(一〇) 爲君容 王勃の詩、君王懷愛赤、歌舞爲君容と、

【題義】 湖北路轉運判官である馬忠玉に次韻して作る、

【詩意】 坡陀の巨麓より連峰が起る、馬家は多年積善を累ねて幸慶が自然に鍾まる、靈運は子も孫も俱に鳳を得て居る、又慈明の兄弟は孰れを看ても皆龍ばかりである、君と河梁の別を告げ雲を看て惜

み、詩社は何ぞ妨げん酒を載せて從ふことを、祇西湖の西子に似たるものがある、故に應に宛轉として君の爲に特に容を作るであらう、

【餘論】 紀曰く、竟似近人祝壽詩と、公は時に杭を離るるに際す、河梁云云と言ふ所以である、

三夢牡丹

三夢の牡丹

風雨何年別留眞向此邦。

風雨何の年にか別る、眞を留めて此の邦に向ふ、

至今遺恨在巧過不成雙。

今に至りて遺恨在り、巧過雙を成さず、

【詩意】 風を侵し雨を衝いて何の年にか別れたるや、只我が一眞を留めて復た此の杭州に向ふ、曾てより今日に至るまで遺恨ある、其れはハナブサが三と云ふ異態即ち巧み過ぎて雙を成さざることである、

【餘論】 此の詩は古今の注家一言も辨する者無く、要するに其の意義明白ならざるに由る、康熙勅選の佩文韻府にも蘇軾三夢牡丹詩云とあるのみにて、羣芳譜、陸放翁牡丹譜にも牡丹の三夢又は一夢などの記事は無く、實際を言ふと公を泉下に喚起して自らの説明を請ふより外なきものである、然れども現世にて公に代る大學者ありて、眞に此の詩を釋明せらるるあらば、大幸である、大幸である、

予去杭十六年而復來留二年而去平日自覺出處老少  
似樂天雖才名相遠而安分寡求亦庶幾焉三月六日來別

南北山諸道人而下天竺惠淨師以醜石贈行作三絕句

予杭を去りて十六年にして復た來る、留まること二年にして去る、平日自ら覺ゆ出處老少、蘇樂天に似たりと、才名は相遠しと雖も、安分寡求も亦庶幾し、三月六日來りて南北山諸道人と別る、下天竺の惠淨師、醜石を以て行を贈らる、三絶句を作る

當年衫鬚兩青青

當年衫鬚兩ながら青青

強說重臨慰別情

強ひて重臨を説いて別情を慰す

衰髮祇今無可白

衰髮は祇今白くすべき無し

故應相對話來生

故に應に相對して來生を話すべし

【字解】(一) 衫鬚 海屋實曰く、用衫字、方合兩字、若用雙字、則復兩字、矣と、(二) 重臨 劉夢得の詩、重臨事異黃丞相と、(三) 無可白 昔叔夜の養生論、從衰得白、從白得老と、黑髮は一本も無きを云ふ、(四) 話來生 來生は來世と同じ、經典に出處を見ず、

【題義】予が杭州を去つてより十六年後に復た來る、此の時は二年にして去る、予が出處老少は蘇樂天に似て居る、其の才名は樂天と予とは懸遠あるが、安分寡求は其の近接するものがある、三月六日來りて、去らんと欲して南山北山の諸道人に別を敘す、而して下天竺寺の惠淨師は醜石を以て饒別とせらる、三絶句を作る、

【詩意】初めて來りし時は衣も衫鬚も兩ながら青青であつた、其の時の別れは重臨するからと説いて別情を慰めた、所で祇今は衰髮にて此の上に白く成り様が無い、さらば今生にて再び對面することは覺えない今度は來生にて對面するであらう、

〔一〕

〔二〕

出處依稀似樂天

出處依稀樂天に似たり

敢將衰老較前賢

敢て衰老を將て前賢に較せんや

便從洛社休官去

便ち洛社に官を休め去つてより

猶有閒居二十年

猶は有り閒居二十年

【字解】(一) 樂天 樂天は初め進士、京兆戶曹參軍、江州刺史、司門員外郎、中書舍人、杭州刺史、蘇州刺史の諸官を經る、(二) 敢將 韓退之の詩、敢將衰朽情、殘年と、(三) 洛社 洛陽の詩社、(四) 二

【詩意】予が出處は依稀として樂天に似て居る、敢て衰老の身分を將て前賢に比較するのではない、便ち洛社に於て官を休め去つてより、猶は閒居しての樂は二十年ある、

〔一〕

〔二〕

古今體詩 予去杭十六年而復來留二年而去贈行作三絶句

在郡依前六百日。 在郡は前に依つて六百日、

山中不記幾回來。 山中記せず幾回來るを、

還將天竺一峰去。 還た天竺一峰を將て去る、

欲把雲根到處栽。 雲根を把つて到處に栽せんと欲す、

【詩意】 在郡の身は前に依つて六百日即ち二年である、天竺山中には幾回來るかを記憶して居らない、還た天竺の一峰石を將て去る、而して雲根を把つて到處に栽せんと欲するのである、

【餘論】 紀曰く、沈著語、又恰是對僧語と、平生は多く用ふる語、來生は用ふること少、紀が此の評を下す所以である、

【字解】 〔一〕 在郡 白樂天の詩、在郡六百日、入山十二回と、〔二〕 一峰 隴石が自然に天竺峰の形状を爲す、〔三〕 雲根 石の異名、張翥の詩、雲根臨八極、雨足散四溟と、

和林子中待制 林子中待制に和す

兩翁留滯各皤然。 兩翁留滯し各の皤然、

人笑迂疎老更堅。 人は笑ふ迂疎老いて更に堅しと、

共把鷺兒一尊酒。 共に鷺兒一尊の酒を把つて、

相逢卵色五湖天。 相逢ふ卵色五湖の天、

【字解】 〔一〕 兩翁 林と公、〔二〕 留滯 韓文公の詩、安得久滯留と、〔三〕 皤然 「尙書」に、蒼蒼黃髮と、班固の詩、皓髮鬢老と、黃髮と、班固の詩、皓髮鬢老と、〔四〕 老更堅 「後漢馬援傳」に、昔謂人曰、丈夫爲志、窮當益堅、老

江邊遺愛啼斑白。 江邊の遺愛斑白啼き、

海上先聲入管絃。 海上の先聲管絃に入る、

早晚淵明賦歸去。 早晚か淵明歸去を賦し、

浩歌長嘯老斜川。 浩歌長嘯斜川に老いん、

當益壯と、〔二〕 卵色 孫光憲の詞、一方卵色楚南天と、〔三〕 遺愛 「左傳昭二十」に、子產卒、仲尼聞之出涕曰、古之遺愛也と、〔四〕 先聲 「漢韓信傳」に、兵固有先聲而後實者と、〔五〕 斜川 淵明に游斜川の詩がある、

【詩意】 二翁は官途に留滯して各の白髮に至る、人は笑ふ二翁の迂疎にして老いて更に頑堅なるを、共に鷺兒一尊の酒を把つて、相逢ふと同じく酌む恰も卵色五湖の天である、江邊の遺愛は斑白の老人を啼かしむ、海上の先聲は管絃に入る、早晚か淵明の如くに歸去を賦して、浩歌長嘯して斜川に老いん、

【餘論】 歸ると言ひ、歸ると言ふ、公の常套語、應酬の作、心にも無きことを饒舌して一篇の詩と爲す、公も時代の人たるを免れない、

次韻答黃安中兼簡林子中 次韻黃安中に答へ、兼ねて林子中に簡す

老去心灰不復然。 老い去つて心灰復た然えず、

一麾江海意方堅。 一麾江海意方に堅し、

【字解】 〔一〕 一麾 杜牧之の詩、乞得一麾江海在、樂游原上望昭陵と、〔二〕 黃安中 「晉書」に、劉琨、

那堪黃散付子度。 那ぞ堪へん黄散子度に付するに、

空羨蘇杭養樂天。 空しく羨む蘇杭に樂天を養ふを、

病肺一春難白酒。 病肺一春白酒難く、

別腸三夜繞朱絃。 別腸三夜朱絃を繞る、

羣仙正欲吾歸去。 羣仙正に吾と歸去せんと欲す、

共把清風借玉川。 共に清風を把つて玉川を借らん、

州、去年脫。杭印、今年佩。蘇印、既醉。子彼、又吟。子此、則蘇杭之風景、章房之詩酒、兼有之矣。【一】病肺。杜子美の詩、春復加。肺氣、此病蓋有因、早歲與。蘇、痛飲情相親と、【二】朱絃。陸士龍の詩、朱絃調。素琴と、【三】玉川。盧仝の詩、蓬萊山在。何處、玉川子、乘。此清風。欲。歸去、山上羣仙。可。下土、地位清高。隔。風雨と、

【題義】黃安中は邵武の人、名は履、諸州の刺史を歴て、尚書右丞に進み、尙ほ蘇州の刺史を兼ね、子中は公が杭州の刺史たりしとき其の代理を行ひし人、黃安中の詩に次韻して答へ、序に林子中に示せるものである、

【詩意】老い去つては功名の心は已に灰と爲つて復た然えない、一塵江海の意は方に堅固にして動かぬ、那ぞ堪へん黄散の職を持ちながら子度に付託し去るに、空しく羨む蘇杭の二州に樂天を養ふを、肺を病んで一春の間白酒を飲まない、而かも別れんとするに臨み三夜も朱絃を聞かされた、羣仙に寄

語するが吾は正に歸去せんとする、共に清風を把つて玉川に借し與へよ、

留別蹇道士拱辰

蹇道士拱辰に留別す

黒月在濁水。何曾不清明。

黒月濁水に在り、何ぞ曾て清明ならざらん、

寸田滿荆棘。梨棗無從生。

寸田荆棘滿つ、梨棗從つて生ずる無し、

何時返吾眞。歲月今崢嶸。

何時か吾眞に返らん、歲月今崢嶸たり、

屢接方外士。早知俗緣輕。

屢は接す方外の士、早く知る俗縁の輕きを、

庚桑託雞鶻。未肯化南榮。

庚桑雞鶻に託し、未だ肯て南榮に化せず、

晚識此道師。似有宿世情。

晩に此の道師を識る、宿世の情有るに似たり、

笑指北山雲。詞我不歸耕。

笑うて指す北山の雲、詞す我が歸耕せざるを、

仙人漢陰馬。微服方地行。

仙人漢陰馬、微服方地に行く、

咫尺不往見。煩子通姓名。

咫尺往見せず、子を煩はして姓名を通す、

願持空手去。獨控橫江鯨。

願はくは空手を持して去らん、獨控せん横江の鯨、

【字解】

【一】黒月。「北山錄」に、西土子。一月中、前十五日、爲。白月、後十五日、爲。黒月と、【二】濁水。「莊子山水篇」に、

於濁水、而逢清源と、【三】 登萊 ナシ、ナツメ、章蘇州の時、貧居燼火瀾、歲熟聚粟雲と、【四】 返吾眞 「説苑」に、木偶人、謂土偶人曰、子先土也、天大雨、水潦盈門、子且必覆、土偶人曰、吾乃反吾眞也と、【五】 靜嶺 第一義は山の險阻を謂ふ、轉じて歲月の積み重なる義、【六】 方外士 道士、法師を皆方外士と稱す、「莊子」に、游方外、游方内と、【七】 俗緣 「蓮社雜錄」に、謝靈運、俗緣未盡と、【八】 唐桑 「莊子庚桑楚第二十三」に、庚桑子曰、辭盡矣、曰、奔蜂不能化、蓬蒿、越雞不能伏、鵲卵、魯難因能矣、雖之與、雖、其德非不、同也、有能與不能者、其才固有巨小也、今吾才小、不足、以化、子、子胡不南見老子、而榮、唐虞、繼、七日七夜、至老子之所と、【九】 道師 導師に作るがよい、「佛敎」に、佛是三界大導師と、【一〇】 宿世 「法華授記品」に、宿世因緣、吾今當説と、【一一】 漢陰馬 「漢書」に、陰長生、新野人、陰皇后之親屬、生富貴之門、不好榮利、聞馬鳴生得、度世之道、乃執奴僕之役、十餘年不懈、鳴生曰、子眞能得道矣、乃授以丹經二數之合丹、二仙既合丹成、不樂、昇天、但願、牛期、爲地仙と、【一二】 空手 「漢書」に、與空手一同と、【一三】 性 性者不用、謂釣、空手提釣也と先注に在り、

【題義】 蹇拱辰と稱する廬山の道士と留別する詩である、

【詩意】 黒月が濁水に印在すれば、其の光影は清明とは言へない、寸田に荆棘が充滿すれば、梨棗の如き嘉樹は從つて生ずることは無い、我等は濁水荆棘の身何の時にか吾が眞に返ることが出来る、徒らに歲月のみ積んで轉縁である、然れども修養の心を存する故に屢ば方外の士に接近する、是が爲め早く俗縁の輕きことを知る、而かも庚桑の如き今日の方外士は口を雞鶩に託して、未だ肯て今日の南榮は教ふるに足らずとして教化して呉れない、然るに晩年に及んで拱辰導師を識ることが出来た、考へて見れば偶然ではなく宿世の善情あるに由るかと、料らざりき笑うて北山の雲を指して、我が早く歸咄せざるを叱訶せらる、思ふに導師は漢の仙人陰馬ならずやと、微服して普通人と同じく方地に行

く、所が咫尺でも仙と人とは異なる往見は出来ない、子を煩はして姓名を通ずるのみ、願はくは空手にして去れ、獨り横江横海の巨鯨を捉る爲である、

【餘論】 五古一韻、作法例の如く分明である、

次韻子由書王晉卿畫山水一首而晉卿和二首

子由が王晉卿が畫山水に書する一首、而して晉卿の和二首に次韻す

誤點故教同子敬、  
 雜篇眞欲擬湯休、  
 隴雲寄我山中信、  
 雪月追君溪上舟、  
 會看飛仙虎頭篋、  
 却來顛倒拾遺裘、

王孫辦作元眞子、  
 王孫辦作元眞子、

古今體詩 次韻子由書王晉卿畫山水一首而晉卿和二首

【字解】 【一】 誤點 「晉王獻之傳」に、獻之字子敬、桓温嘗使書扇、筆誤落、因畫作鳥獸特牛、甚妙と、【二】 山中信 梁高祖、問陶宏景、山中何所有、陶爲時曰、山中何所有、嶺上多白雲、只可自怡悅、不堪持寄君と、【三】 雪月 晉の王徽之は雪後月夜に女の戴安道を訪ひ剡溪に至るも中途にて興盡きたりと稱して舟を還す、【四】 虎頭篋 「晉顧愷之傳」に、嘗以一廚畫、獨題其前、寄桓元、桓元發其厨後、





次韻子由書王晉卿畫山水二首

子由が王晉卿の畫山水に書せる二首に次韻す

老去君空見畫

老去去つて君空しく畫を見る、

夢中我亦曾遊

夢中に我も亦曾遊す、

桃花縱落誰見

桃花縱ひ落つるも誰か見る、

水到人間伏流

水は人間に到り伏して流る、

【題義】子由が王晉卿の畫山水に書せる二首に次韻して作つたもの、

【詩意】老去去つては君は目親しく山水を見ずして空しく畫を見る、夢中に我も亦曾遊せしことがあ  
る、桃花縱ひ落つるも誰か見るや、水は人間に流れ到るも伏して流れて人は知らない、

〔二〕

山人昔與雲俱出

山人昔雲と俱に出づ、

俗駕今隨水不回

俗駕今水に隨うて回らず、

頼我胸中有佳處

頼に我が胸中佳處有り、

〔二〕

【字解】〔一〕俗駕、「北山移文」に、  
【詩意】山人は昔山雲と俱に山を出て、俗駕に隨うて遊び水に隨うて回らない、頼なるには我は胸中  
に佳處があるから、一樽時に畫圖に對して開く、

一尊時對畫圖開 一尊時に畫圖に對して開く、

【詩意】山人は昔山雲と俱に山を出て、俗駕に隨うて遊び水に隨うて回らない、頼なるには我は胸中  
に佳處があるから、一樽時に畫圖に對して開く、

又書王晉卿畫四首

又王晉卿が畫に書す 四首

山陰陳迹

山陰の陳迹

當年不識此清眞

當年識らず此の清眞、

強把先生擬季倫

強ひて先生を把つて季倫に擬す、

等是人間一陳迹

等しく是れ人間の一陳迹、

聚蚊金谷本何人

聚蚊金谷本何人ぞ、

【字解】〔一〕山陰、越州の山陰  
縣、蘭渚あり、渚に蘭亭あり、晉の永  
和九年三月三日、王羲之が四十一人  
の名士と此に會し、蘭亭記を作る、  
記序に、俯仰之間、已爲陳迹と、  
〔二〕先生、王逸少を言ふ、〔三〕  
聚蚊、晉の石崇字は季倫、金谷園を作り客を極む、「石崇自序」に、余有別墅、在金谷園中、清泉茂樹、衆葉竹柏、藥物備具と、  
【題義】王晉卿が畫く所の四幅に贊を書したるもの、  
【詩意】當年山陰の會の清眞なることは誰も識らない、識らないから強ひて先生が清會を以て季倫の

古今體詩 次韻子由書王晉卿畫山水二首 又書王晉卿畫四首・山陰陳迹

如き俗物に擬するに至る、等しく是れ人間が名を留めたる一陳迹であるが、聚蚊や金谷は本何等の癡人ぞや、

雪溪乘輿

雪溪の乘輿

溪山雪月兩佳哉。

溪山の雪月兩ながら佳なる哉。

賓主談鋒夜轉雷。

賓主の談鋒夜雷を轉す。

猶言不見戴安道。

猶は言ふ戴安道を見ずと。

爲問適從何處來。

爲に問ふ何の處に適從し來ると。

【字解】〔一〕談鋒、公の創作、談論争鋒である、〔二〕戴安道、魏

遠の字、〔三〕爲問、賀知章の詩、

笑問客從何處來と、〔四〕適從、

左傳僖公五年に、一國三公、吾誰適從と、

【詩意】溪山に雪もあり月もあり兩ながら佳なる哉、此の雪溪に於て賓主對談して其論鋒の鋭は夜雷を轉するかと思はる、此の如く盛んに輿に乗するに猶は戴安道を見ずと言はば、爲に問ふ雪溪に往いて何の處に適從し來るのであるぞや、

四明狂客

四明の狂客

毫端偶集一微塵。

毫端偶ま集む一微塵、

【字解】〔一〕四明狂客、唐賀知

何處溪山非此身。

何の處の溪山か此の身に非ざらん、

狂客思歸便歸去。

狂客歸を思はば便ち歸去せよ、

更求勅賜枉天真。

更に勅賜を求めて天真を枉げん、

章は自ら四明狂客と稱す、〔二〕毫

端、韓愈の詩、下、毫端、九州、一塵

集、毫端、と、〔三〕勅賜、「唐書」

に、賀知章、晚節放誕、號四明狂

客、遂爲道士、勅賜、鏡湖一頃、と、

【詩意】四明の道士は一毫端に山河大地の一微塵も餘さず集めて居る、然らば何の處の溪山も此の一身の外にはない、されど狂客が歸を思ふとなれば自由に歸去し玉へ、此の上更に勅賜を求めて天真を枉屈してはならぬ、

西塞風雨

西塞の風雨

斜風細雨到來時。

斜風細雨到來の時、

我本無家何處歸。

我本家無し何の處に歸らん、

仰看雲天真箬笠。

仰いで雲天を看れば眞に箬笠、

旋收江海入蓑衣。

江海を旋收して蓑衣に入れん、

【字解】〔一〕西塞、吳興志

に、西塞、孤城南一帶遠山是也と、

唐書志和は、西塞山下漁父詞を作る、

〔二〕箬笠、箬は蓆ザサ、此のササ

【詩意】斜風細雨が遽然として到來する時、我は本吾が家は無し何の處に歸るや、首を擧げて仰いで

天を看れば眞に筈笠の形である、一層のこと江海を旋收して蓑衣に入れんか、  
 【餘論】紀曰く、四首皆刻意翻新、而皆乏天然之妙と、天然の妙を公の詩に於て求むるは、魚を求めて木に縁るの類、唐の孟浩然は天然の妙詩に富む、而して公は平生孟が學殖淺きを笑ふ者、公は人間の巨鯨である、蘇潮を吞吐して、觀る人をして驚心動魄せしむれば足る、鯨肉と鯛肉とは、固より同日に語ることは出来ない、孟襄陽は鯛肉にて、蘇玉局は鯨肉であると知らば、復た別に細論は無用である、清の眞一齋は曰く、裁三翦書籍一成詩、黃山谷、最欲以此見長と、余は此の語を公に移して可と思ふのである、

破琴詩

破琴の詩

舊說房瑄開元中嘗宰盧氏與道士邢和璞出遊過夏口邨入廢佛寺坐古松下和璞使人鑿地得甕中所藏婁師德與永禪師書笑謂瑄曰頗憶此耶瑄因悵然悟前生之爲永師也故人柳子玉寶此畫云是唐本宋復古所臨者元祐六年三月十九日予自杭州還朝宿吳淞江夢長老仲殊挾琴過余彈之有異聲熟視琴頗損而有十三絃予方嘆息不已殊曰雖損尙可修曰奈十三絃何殊不答誦詩云度數形名本偶

然破琴今有十三絃此生若遇邢和璞方信秦箏是響泉予夢中了然識其所謂既覺而忘之明日晝寢復夢殊來理前語再誦其詩方驚覺而殊適至意其非夢也問之殊蓋不知是歲六月見子玉之子子文京師求得其畫乃作詩并書所夢其上子玉名瑾善作詩及行草書復古名迪畫山水草木蓋妙絕一時仲殊本書生棄家學佛通脫無所著皆奇士也

【訓讀】舊說、房瑄開元中、嘗て盧氏に宰たり、道士邢和璞と出でて遊ぶ、夏口邨を過ぎ、廢佛寺に入り、古松下に坐す、和璞、人をして地を鑿せしめ、甕中藏する所の婁師德が永禪師に與ふる書を得たり、笑うて瑄に謂つて曰く、頗く此を憶ふや、瑄因つて悵然として前生の永師爲るを悟る、故人柳子玉、此の畫を寶として云ふ、是れ唐本宋復古臨する所のもの、元祐六年三月十九日、予杭州より朝に還り、吳淞江に宿し、夢む長老仲殊、琴を挾んで余に過ぎ之を彈す、異聲あり、熟視すれば琴頗る損じて十三絃あり、予方に嘆息已ます、殊曰く損すと雖も尙ほ修すべし、曰く十三絃を奈何せん、殊答へず、詩を誦して云ふ、度數形名本偶然、破琴今有十三絃、此の生若し邢和璞に遇はば、方に信す秦箏は是れ響泉と、予夢中了然として其の謂ふ所を識る、既に覺めて之を忘る、明日晝寢、復た夢む殊來りて前語を理し、再び其の詩を誦す、方に驚き覺めて殊適に至る、意ふに其れ夢に非ざるなり、之を

問へば殊蓋し知らず、是の歳六月子玉の子子文を京師に見る、求めて其の畫を得、乃ち詩を作り并に夢みる所を其の上に書す、子玉名は璫、善く詩及び行草書を作る、復古名は迪、山水草木を畫く、蓋し一時に妙絶、仲殊本書生、家を棄て佛を學び、通脱して所著無し、皆奇士なり、

破琴雖未修。中有琴意足。

破琴未だ修せずと雖も、中に琴意の足る有り、

誰云十三絃。音節如佩玉。

誰か云ふ十三絃と、音節佩玉の如し、

新琴空高張。絲聲不附木。

新琴空しく高く張り、絲聲木に附かず、

宛然七絃箏。動與世好逐。

宛然七絃箏、動もすれば世好と逐ふ、

陋矣房次律。因循墮流俗。

陋し房次律、因循流俗に墮す、

懸知董庭蘭。不識無絃曲。

懸に知る董庭蘭、無絃の曲を識らず、

【字解】 十三絃 「西京雜記」に、高祖初入成陽宮、有琴長六尺、安十三絃、用七寶飾之、銘曰璫製之樂と、【二】佩玉 「毛詩大雅」に、佩玉節節と、【三】高張 劉禹錫の詩、美人愛高張と、【四】絲聲 劉禹錫の文、使木聲絲聲均と、【五】七絃 箏はコト、箏の類、本十二絃、秦の蒙恬は十三絃を製作す、【六】世好逐 時代の俗耳に入るを求めて、正樂を俗樂とする、

【七】房次律 房瑄の字は次律、【八】因循 「漢書循吏傳」に、因循守職、無所改作と、舊習を守りて移らざるを言ふ、【九】流俗 「禮記射義」に、不從流俗と、【一〇】董庭蘭 房次律に依倚して、琴を造る職工の名、【一一】無絃 白樂天の詩、有琴無絃不彈、亦與無絃一同と、

【題義】 舊説に傳へて居る、唐の房瑄は玄宗の開元中に唐氏の宰と爲る、道士邢和璞と云ふ者と出游して夏口邨に過ぎ、廢佛寺に入つて古松の下に休坐す、其の時は道士は人をして地を鑿せしめて、一箇の甕を得、其の甕中を檢すれば、婁師徳が永禪師に與へし書があつた、道士は笑うて瑄に頗く此の事を記憶するや否やと問へば、瑄は但恨然として、前生は智永禪師であつたことを悟つた、予が故人の柳子玉は此の畫圖を家寶として云ふ、是れ唐の本ではなく本朝の臨本であると、予杭州よりの歸途吳淞（今のウーソン）に宿して、夢に長老仲殊來り、琴を弾じて余を訪ひ、其の琴聲は異聲を響かすに依つて熟視すれば、琴は破損して十三絃ある、予は嘆息して已まざれば、仲殊は破損は修理すれば何でもない、予は修理は出来るが、十三絃をどうするかと言へば、仲殊は返答せず但詩を誦して居る、是れ吳淞に於て夢中の事ではあるがハツキリと記憶する、目が覺めてから全く之を忘れ去つた、其の明日晝假寝する、復た夢に仲殊來り再び前詩を誦吟せらる、方に驚いて夢覺むれば、夢にあらざる本身の仲殊が訪はる、して見ると鬚の夢ではなく真であつたやうにも思はる、殊に問ふも殊は全く知らずと答へらる、是の歳の六月に子玉の子子文と京師にて遇うた序でに、其の畫を求め、詩を作り夢中の事を記して題する、子玉は詩及び行草の字を善書する者、復古は山水を善畫、草木を描く最も妙絶なる者、仲殊は晩年出家して、通脱にして執著なき人、皆奇士である、

【詩意】 破琴は破琴のままにして未だ修繕はしない、が中に自然と琴意は十分に足る、誰か之を十三絃と云ふや、音節は鏘鏘として佩玉の如き佳音を發する、新琴は空しく高く張るも、絲の聲と

其の木臺の聲と一致しない、宛然として七絃箏かと疑ふ、彈琴の人物もすれば世俗の好む所と追逐する、予は陋矣と思ふ房次律の心を、前身清淨なる永禪師の面目を消滅して渾て沈俗に墮して居る、又懸に知る彼の工人の董庭蘭は、到底無絲の曲などは識る者ではない、

【餘論】 紀曰く、語多深至と、

書破琴詩後

破琴詩後に書す

余作破琴詩求得宋復古畫邢和璞於柳仲遠仲遠以此本託王晉卿臨寫爲短軸名爲邢房悟前生圖作詩題其上

【訓讀】 余破琴の詩を作り、宋復古が畫く邢和璞を柳仲遠に求め得たり、仲遠此の本を以て、王晉卿に託して臨寫し、短軸と爲し、名づけて邢房悟前生圖と爲す、詩を作りて其の上に題す、

此身何物不堪爲 此の身何物か爲すに堪へざらん、

逆旅浮雲自不知 逆旅浮雲自ら知らず、

偶見一張閒故紙 偶ま見る一張の閒故紙、

便疑身是永禪師 便ち疑ふ身は是れ永禪師かと、

【字解】 (一) 不堪爲 「莊子大宗師に、偉哉、造物又將奚以汝爲、將奚以汝適、以汝爲鼠肝、以汝爲蟲臂、手と、 (二) 逆旅 「莊子知北游に、世人直爲物逆旅一耳と、 (三) 永禪師 五代の世に永禪師あり

るが唐後なれば關係は無い、是は晉の壁水を謂ふか、壁道の東林に對し、西林に居を占む、唐の玄宗之に覺寂大師の諡號を賜ふ、

【題義】 破琴詩を作りて後、宋復古が畫く所の道士邢和璞の像を柳仲遠に求めて得、仲遠は此の本を以て王晉卿に託して臨寫せしめ、短軸と爲し、名づけて邢房悟前生圖と曰ふ、此の詩を其の上に題したのである、

【詩意】 此の身は自由に變化して何物にも變爲に堪へるのである、逆旅と爲り浮雲と爲り要するに自ら知らない、偶ま一張の閒故紙を見て、便ち疑ふ此の身の前生は永禪師であつたことを、

題王晉卿畫後 王晉卿が畫後に題す

醜石半蹲山下虎 醜石半蹲す山下の虎、

長松倒臥水中龍 長松倒臥す水中の龍、

試君眼力看多少 試みに君が眼力看多少ぞ、

數到雲峰第幾重 數へて到る雲峰の第幾重、

【餘論】 郵學究の詩、決して公の眞作ではない、紀は公の詩と見て粗獷と評せるが、偶ま郵學の詩、誤つて此に擬入したのである、

聽<sub>二</sub>武道士彈<sub>一</sub>賀若<sub>二</sub>武道士が賀若を彈するを聽く

清風終日自開簾<sub>二</sub>清風終日自から簾を開く

涼月今宵肯挂簾<sub>二</sub>涼月今宵肯て挂簾

琴裏若能知賀若<sub>二</sub>琴裏若し能く賀若を知らば

詩中定合愛陶潛<sub>二</sub>詩中定んで合に陶潛を愛すべし

無狀小人、東坡詩、以賀若、比陶潛、必高人、非謂賀若也、予考之、蓋賀若夷也、夷書、鼓琴、王維居別墅、長使鼓琴娛賓、見唐書王維傳中、

【題義】武と稱する道士が賀若と名づくる琴を彈するを聽きて作る詩である、

【詩意】晝間は清風が終日自から簾を開きて入る、晝間此の如き晴景夜間も定んで涼月は肯て檐端に挂かることと思ふ、琴裏に若し能く賀若夷と云ふ高人を知らば、詩中にも定んで合に陶淵明と云ふ高人を愛するであらう、

【餘論】紀曰く、蘊藉得好と、有るもよし、無きもよしの凡評、

元祐六年六月自杭州召還汝公館我於東堂閱舊詩卷次  
諸公韻三首

元祐六年六月、杭州より召さる、汝公の館に還る、我東堂に於て舊詩卷を閲し、諸公の韻に次す 三首

半熟黃梁日未斜<sub>二</sub>半は熟す黃梁日未だ斜ならず

玉堂陰合手栽花<sub>二</sub>玉堂陰合するは手栽の花

却思三十年前味<sub>二</sub>却つて思ふ三十年前の味

未飯鐘時已飯茶<sub>二</sub>未だ飯鐘ならざる時已に飯茶

及三番至、已飯矣、後二紀、未出、飯是邦、向所題字、已碧紗籠其上矣、乃題二絕、一云、上堂已了各西東、懶憶閑餐飯後鐘、二十年前應撰面、如今始得碧紗籠と、

【題義】元祐六年、年五十六の時、杭州より汴京に召還され、京中馬軍橋東北に在る興國寺に入つて慧汶と云ふ和尚の館に憩うて東堂に三十年前の舊詩卷を讀み、乃ち諸公の韻に次し、此の三首を作りしものである、

【詩意】黃梁は未だ半熟までに至らないし、日も未だ斜ならざるの間、玉堂に會て手栽せし花樹は陰合する大木と成る、却つて思ふ三十年前の味を、未だ飯鐘を打たざるのに已に飯茶を報せらる、

【一】

【二】

夢覺還驚屨響廊<sub>二</sub>夢覺めて還た驚く屨廊に響くに、  
【字解】【一】屨、皮日休の詩、

古今體詩 蘇武道士彈賀若 元祐六年六月自杭州召還汝公館我於東堂閱舊詩卷三首

故人來炷影前香。 故人來炷炷影前的香、  
鬢須白盡成何事。 鬢須白盡して何事を成す、  
一帖空存老遂良。 一帖空しく存す老遂良、

【自注】法帖中。有褚遂良書。即日遂良。須髮盡白。

蘇軾中命王步と、屢に木展、  
影前。公自身の寫眞の前、王注に、次  
公曰、先生有畫像在院中。故也と、

【詩意】夢覺めて還つて驚く屢の聲が廊に響くに、其の屢聲は故人が來りて我が影前に一炷香を焚くのである、我は如何鬢も須も皆白盡して何事をか成したるや、一帖空しく老遂良を存するのみである、

〔三〕

〔三〕

尺一東來喚我歸。 尺一東來して我が歸を喚ぶ、  
衰年已迫故山期。 衰年已に迫る故山の期、  
文章曹植今堪笑。 文章曹植今笑ふに堪へたり、  
却卷波瀾入小詩。 却つて波瀾を卷いて小詩に入る、

【字解】〔一〕尺一。天子の詔書を言ふ、〔二〕衰年。白樂天の詩、人間更何事、拙手趁衰年と、〔三〕文章。杜子美の詩、文章曹植波瀾闊と、

【詩意】尺一の詔書は我を京都に召歸すのであつた、京都ではない故山に歸期も衰年已に迫つて居るのである、文章曹植と言はるる身も今は一笑するに堪へたるのみ、却つて波瀾を卷きて小詩に入る、

【餘論】紀は第一の詩を評して一首俱有情致と、俱の字何の事やら分らない、余は三首俱に情致あると思ふ、公は文章波瀾を積むの人、巻く人ではない、今は波瀾を卷いて小詩に入ると云ふ、公自ら自らを知るもの、

感舊詩

感舊の詩

嘉祐中予與子由同舉制策寓居懷遠驛時年二十六而子由二十三耳。一日秋風起雨作中夜愴然有感慨離合之意自爾宦遊四方不相見者十嘗七八每夏秋之交風雨作木落草衰輒悽然有此感蓋三十年矣元豐中謫居黃岡而子由亦貶筠州嘗作詩以紀其事元祐六年予自杭州召還寓居子由東府數月復出領汝陰時予年五十六矣乃作詩留別子由而去。

【訓讀】嘉祐中、予子由と同じく制策に舉し、懷遠驛に寓居す、時に年二十六、而して子由は二十三年のみ、一日秋風起り、雨作り、中夜愴然、感慨離合の意あり、爾より四方に宦遊、相見ざるもの、十に嘗に七八、每夏秋の交、風雨作り、木落ち草衰ふ、輒ち悽然此の感あり、蓋し三十年なり、元豐中

黃岡に謫居し、而して子由も亦鶴州に貶せらる、嘗て詩を作り、以て其の事を紀す、元祐六年、予杭州より召還せられ、子由の東府に寓居す、數月にして復た出でて汝陰を領す、時に予年五十六なり、乃ち詩を作り、留めて子由に別れて去る、

【字解】 〔一〕嘉祐、仁宗の年號、〔二〕舉制策、天子自ら照して非常の人材を持つを謂ふ、〔三〕懷遠、今の懷遠とは違ふ、不明、  
〔四〕元豐、神宗の年號、〔五〕黃岡、黃岡縣即ち黃州、今日の湖北省、〔六〕鶴州、今の江西省高安縣、〔七〕元祐、哲宗の年號、  
〔八〕東府、宋史に、樞密院、與中書省對、持文武二柄、號爲二府、東府、掌文事、參政佐之、西府、掌武事、副使佐之と、  
〔九〕汝陰、潁州の汝陰郡、今の安徽省に屬す、

牀頭枕馳道雙闕夜未央  
車轂鳴枕中客夢安得長  
新秋入梧葉風雨驚洞房  
獨行殘月影悵焉感初涼  
篋仕記懷遠謫居念黃岡  
一往三十年此懷未始忘  
叩門呼阿同〔自注〕子由一字同叔。

牀頭馳道に枕し、雙闕夜未央ならず、  
車轂枕中に鳴る、客夢安んぞ長きを得ん、  
新秋梧葉に入り、風雨洞房を驚かす、  
獨行す殘月の影、悵焉として初涼を感ず、  
篋仕懷遠を記す、謫居黃岡を念ふ、  
一往三十年、此の懷未だ始より忘れず、  
門を叩いて阿同を呼ぶ、

安寢已太康

寢に安んず已に太康

青山映華髮歸計三月糧

青山華髮に映す、歸計三月の糧

我欲自汝陰徑上潼江章

我汝陰より、徑ちに潼江章に上らんと欲す、

想見冰盤中石蜜與柿霜

想ひ見る冰盤の中、石蜜と柿霜と、

〔自注〕予欲、謂、東川而歸、二物皆東川所出。

憐子遇明主憂患時再嘗

憐む子が明主に遇ひ、憂患已に再び嘗むるを、

報國何時畢我心久已降

報國何時にか畢らん、我が心久しく已に降る、

【字解】 〔一〕馳道、漢書地理志に、爲馳道於天下と、半歩の許、青松夾馳道と、天子往還の路、〔二〕夜未央、毛詩に、夜如何其、夜未央と、〔三〕洞房、楚辭に、洞房深兮、洞房、深と、俗に奥深き房、多く婦人の房に轉用する、〔四〕篋仕、左、閔公元に、畢萬筮仕于晉と、吉凶を占うて仕官する、〔五〕太康、毛詩に、無已太康、職思其居と、〔六〕明主、史記蘇秦傳に、明主絶疑去讒と、〔七〕再嘗、左、僖二十八年に、晉侯險阻難、備嘗之矣と、

【題義】 嘉祐中に兄弟同じく舉制策として懷遠驛に寓居した、公は二十六、子由は二十三であつた、一日秋風と秋雨と齊しく作りて中夜に及び、殊に愴然たるものあつて、感慨離合の意を感じた、其の以後、四方に宦游して、兄弟相見する時は無かつた、夏秋の候、風雨作る時は、懷遠驛當時を憶ひ起して懷然たるものがある、蓋し三十年を経て居る、元豐中は兄は黃州に謫居して、弟は鶴州に貶せら



れ、嘗て詩を作りて、其の事を記して置いた、元祐六年に予は杭州より召還せられて都下に至り、子由が職を奉ずる東府に寓居す、其れも數月にして今度は汝陰郡の長官として往かざるを得ない、予は年五十六である、乃ち此の詩を作りて以て子由と留別する、

【詩意】東府は馳道に旁うてあるから牀頭の枕は此に在る、雙鬪の状態を見れば夜未だ央でない、車轂の聲は枕中に鳴るのを聞く、客人の夢は悠悠と長く續かない道理である、節は正に新秋にして秋氣は已に梧葉に入つて居る、風雨が洞房を驚かした事に感慨が走る、今は獨行せんと殘月の影に悵焉として初涼の氣に感ずる、筵仕するの一步は懷遠驛である、仕官して後は謫居して黃岡の時もある、今や一往して三十年、此の懷は永く忘るることが出来ない、門を叩きて阿同と呼ぶ、安寢して已に太康の身分である、頭を見ても青山と對映する年となつて居る、而かも歸計は三月の糧である、我は汝陰より路を取りて、徑ちに潼江章に上らんと欲するにある、想ひ見る冰盤の中は、我が好む石蜜と柿霜であらう、憐む子が明主に遇うて、憂患を已に再嘗するを、其の報國の事は何の時にか擧るぞや、我が心は久しく降りて國事に苦勞はしない、

【餘論】紀曰く、真至之言、自然深厚と、子由の樂城集を讀んでも、其の兒を想ふの詩、真至なるもの亦多、共に正學にして正人、真愛にして真敬、古今甚だ稀である、

昭和五年十一月十二日印刷  
昭和五年十一月十五日發行

續國譯漢文大成 文學部 第十六卷 (非賣品)

### 著者權所有

編輯者	國民文庫刊行會
右代表者	東京市神田區小川町一番地 鶴田久作
印刷者	東京市牛込區早稻田鶴巻町一〇七番地 吉原良三
印刷所	康文社印刷所 東京市牛込區早稻田鶴巻町一〇七番地

309  
65

### 發行所

電話神田一八五三三五番  
振替東京一八五七二番

### 國民文庫刊行會

終